

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長寄稿
2面：新任教授紹介
3面：弘前医学会総会
4面：各賞受賞
5面：学士編入学（二年度後期）試験が終わる
6面：AO入試スクーリングが開催
7面：研究室紹介 消化器血液内科学講座
8面：科研費採択状況・人事異動
題字 前弘前大学長 遠藤正彦氏筆

長寄稿
研究科
医学部
医学

青森医専誕生と鳴海康仲先生

医学研究科長 中路重之



品川町の鳴海病院の創設者は鳴海康仲先生です。今、弘前市栄町で開業しておられる鳴海康安先生のお父様です。この康仲先生、弘前の偉人伊東重氏（本学高度先進医学研究センターの伊東健教授の曾祖父）の教えを受けたきわめて崇高な理念の持ち主で、警察医、産業医、保育園・看護学校経営という公の活動をしながら、地域保健医療活動に尽力し、全国（世界）に先駆けて狼森地区で住民の健康相談・保健指導を開始しました。

この鳴海康仲先生、実は弘前医専（弘前大学医学部の前身）生みの親でもあります。今回は鳴海康仲先生を中心とした青森医専誘致の裏話を紹介いたします。情報元は、「（弘前大学医学部）衛生学開講二十五周年誌」にある佐々木直亮教授（当時の衛生学講座教授）による鳴海康仲先生へのインタビュー記事です。

康仲先生「私も本気になって、女子医専を弘前に設置しようとしたのは昭和十六年の末ごろからです。当時の市長乳井英夫さん、市会議長の工藤福弥さんと

嘉瀬英夫君が、私の離れ座敷で唐牛敏世さん（みちのく銀行創設者で初代頭取）の経営している弘前家政女学校か、または朝陽小学校を校舎にして、市立弘前病院を附属病院として是非女子医専をつくることにしようという事になったのです。がそれにはいったい何からどう準備すればいいのか、その方策を野津謙先生（日本における公衆衛生・予防衛生分野の先駆者、また保健所活動の産みの親と言われる。またサッカーの創世記の中心人物であり第四代日本サッカー協会会長）に照会したら、久松栄一郎氏（当時大日本青年団の厚生部長）が北海道に用件があつて行っているから連絡して青森で同様に相談して意見をうかがえ、とのことでした。」

康仲先生はこの当時すでに青森県の保健医療の中心人物として活躍された。また、信じられないような中央の有力者との交友関係もあり、そのなかに野津謙先生がおられました。このようにないささつもあつてWikipediaの「野津謙」を読むと「弘前医専設立に尽力」と書いてあります。

康仲先生「それで当時、かぎや」という青森駅前、古くさい旅館の三階の部屋でお迎えして、久松先生にお話を申し上げて、ご相談したわけ。この先生も

いっているんですから。その農山漁村の衛生を向上させていくという事は、人的資源の向上につながるんだからね。僕は軍医を養成するんじゃないか、人的資源をつくるために医専を設置したいんだが、と言うと、久松先生は、それは大賛成だ、これは通るかも知らんぞ、というので、それは東京へ帰ってから野津先生とも打ち合わせをして返事をよこすからと言って別れたのです。この日は相

康仲先生「お帰りになってから一週間もたたないうちに、よかりそうだから、いよいよ表面的な運動を開始する準備せよという電報が入ったのです。政治的方面は、専ら柏幸次郎氏と本多徳治君がこれに当たり、まず、竹内俊吉代議士、山崎岩男県議員、藤田重太郎県会議員等を通じて当時の知事山田俊介氏が動き出したのは昭和十七年九月から

このように重大なことが旅館の三階で話し合われたわけ。康仲先生「野津先生からは、先日竹内代議士にお目にかかり文部大臣（橋田邦彦先生）へ医専設立の件を通じて置きました。内山文部大臣秘書官のお話によれば、唯今の情勢は有望らしく見受けられました。（中略）医専誘致は略大丈夫だと、山田知事が談話を発表したのは十一月末でした。文部省の閣議で青森と決定したのは、たしかに十二月の初旬だと思いましたが、ところが、大蔵省は群馬なら予算を出す、青森なら予算はつかぬということになったのです。さあ大変です。文部省で決まったものを大蔵省が差しを入れたら、文部省に何たることだ。文部行政に大蔵省が干渉することは不届きである」と、橋田文部大臣は悲憤慷慨したというのを後で聞いたのです。いったい何がそうさせたかということですが、竹内代議士のお手紙や同志の話を聞くと、群馬は中島知久平、星野書記官長等政界の大立者がいて、



農山漁村衛生なんてよりも産業衛生が大事だ。今は戦争中だから、ということであつたということなんです。アオモリイセン、ザンネンナ、イゴマデガンバレ、タケウチ、という電報を新橋駅からもらったのは昭和十七年十二月十二日の午後六時ごろでした。」

それにしても、交通の手段も乏しく、情報アクセスもままならない当時の皆さんの苦勞がしのばれます。康仲先生「当時山田知事も、竹内代議士はじめ県出身の方々も上京中で何人も切歯扼腕、悲憤慷慨し、こうなる上は県立医専を設置すべきである等の意見もありましたが、なんとか来年度昭

和十九年に設置してもらうことにして、一先づおさまつたのであります。青森医専は多くの波乱を含んで、結局は昭和十九年の開設を条件に一先づおさまりました。橋田文部大臣にはまことにご迷惑をかけたと思つていいます。翌年竹内代議士から「アオモリイセン、ケフノカクギ、デ、ケツテイシタ」タケウチ、という至急電報をもらつてホツとしたのは、昭和十八年十二月十日の午後六時半ごろでした。」

康仲先生「創設された青森医専が、のちの弘前医科大学を経て現在の弘前大学医学部誕生につながりました。先人の多大なる努力に対し、深い感謝の気持ちを抱きつつここに紹介いたしました。」

主催、弘前大学の後援で開催されました。会場は二百二十五席の臨床大講堂でしたが、先生方、職員の方々、医学部・他学部の学生、一般の方、三百人以上の方にご来場頂き、超満員となりました。川原尚行先生は九州大学外科学講座のご出身で、外務省医務官としてタンザニア・イギリス・スーダンで勤務されました。外務省医務官の立場では現地の人を診察できないことから外務省を退職され、単身スーダンで医療活動を始められました。現在はスーダンでの医療・教育・国際協力活動に加え、昨年の東日本大震災の復興支援活動に尽力されています。今回は、学生が東北での復興支援活動（瓦礫撤去）・スーダンでの学生研修に参加させて頂いたご縁



アフリカ・スーダンで活動する、認定NPO/NGOロシナンテス理事長川原尚行先生による講演会が七月二十九日、医学部ラグビー部・川原尚行医師を弘前に呼ぶ会・医学部学生自治会・国際医療研究会の

川原尚行医師 講演会開催報告

医学科6年 佐藤陽太

（次ページへ続く）

(前ページより)
で講演会をお願いすることができました。

今回は「スーダンから日本の地域の将来を考えると」というテーマでの講演でした。スーダンでの活動、東北での活動を紹介して頂き、そしてその中で先生の感じることを、さらに私達日本の若者へのメッセージをお話頂きました。スーダンでも、日本の被災地でも、そこに住む人のコミュニティに入り、一緒に生活し、心のケアにも取り組む先生の姿勢は、私達学生にとっても大きな目標となるものだったと思います。御講演の中で、特に印象的だったお話を少し紹介させていただきます。



弘前で の11年間を振り返って

(前)弘前大学大学院医学研究科感染症生体防御学講座 准教授
(現)北里大学獣医学部人獣共通感染症学研究室 教授
胡 東良

二十二年三月三十一日をもって弘前大学大学院医学研究科を辞し、四月一日付で北里大学獣医学部教授に任ぜられ、北里大学十和田キャンパスに異動致しました。弘前大学医学部・大学院医学研究科在任中は公私にわたりご厚情を賜り、この場を借りて心より感謝申し上げます。弘前

二〇一二年三月三十一日をもって弘前大学大学院医学研究科を辞し、四月一日付で北里大学獣医学部教授に任ぜられ、北里大学十和田キャンパスに異動致しました。弘前大学医学部・大学院医学研究科在任中は公私にわたりご厚情を賜り、この場を借りて心より感謝申し上げます。弘前

森が燃えていました。動物達は皆逃げ出しました。そんな中、一羽のハチドリがその小さなくちばしに川の水を貯め、燃え盛る炎に垂らしてはまた川に向かう、そんなことを繰り返してました。他の動物達は笑いました。「そんなことをして何になるのだ。無駄なことは止せ」と。しかしハチドリは「私は、私のできることをしているだけだ」と、一人水を垂らし続けました。



ある方が、川原先生の活動をこのハチドリの話のようですね、と評したそうです。この話のように、一人ひとりの滴の大きさは違

の十一年間大変充実して日々を過ごすことができ、誠にありがとうございます。十一年前、私はちょうどアメリカで研究生生活をスタートしようとした直前に、当時細菌学講座の中根明夫教授から一本のお電話をいただきました。そのお陰で、日本で頑張つて行こうと決意致しました。二〇〇一年四月に、岩手大学から弘前大学に助手として着任致しました。以来、医学部と医学研究科にて教育・研究を担当させていただきました。中根教授をはじめ多くの先生方や事務の



先生のお話には会場は熱気に包まれ、講演終了後は拍手が鳴り止みませんでした。最後に紙面をお借りして、御講演頂きました川原尚行先生、御挨拶頂きました佐藤敬先生、藤哲先生はじめ先生方、事務の方々、広報にご協力頂きました弘前の皆様、ご来場頂きました皆様、そして企画・運営を共にしてくれた仲間にご感謝申し上げます。

実際に卒業後二十八年たった、母校広報紙「医学部ウォーカー」にご挨拶をさせていただきます。心から感謝申し上げます。私は大学卒業後約九年間、横浜市立大学小児科を中心に小児循環器に関する診療と研究に従事いたしました。その後、難治性先天性心疾患の原因究明と治療

なっていました。まさにこのような時期に、自分が人獣共通感染症学研究室を担当することになり、その責任と使命を切実に感じております。微力ではございますが、今後、自分の獣医学出身のバックグラウンドと医学研究科での十一年間の経歴を生かして一層努力し、ヒトと動物の健康と福祉に少しでも役に立つことができたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後に、胡を温かく迎えて、新米教授まで育ててくださいました。弘前大学大学院医学研究科の皆様にごより感謝申し上げます。本当にありがとうございます！

お久しぶりです
東京慈恵会医科大学
細胞生理学講座教授就任に際して

昭和五十九年（一九八四年）弘前大卒
南 沢 享

略 歴

1984年	弘前大学医学部卒業
1986年	横浜市立大学臨床研修医修了
1993年	横浜市立大学歯学部生理学教室助手
1996年	カルフォルニア大学サンディエゴ校留学
2000年	東京女子医大心臓血管研究所循環器小児科特任助手
2002年	横浜市立大学生理学第1講座講師
2004年	同助教授
2007年	早稲田大学先進理工学部生命医科学科教授
2012年	東京慈恵会医科大学細胞生理学講座教授

私は医学部時代には準硬式野球部に所属し、殆どの時間を野球に費やしました。私が二年生の時に創部以来の東医体初優勝をしましたが、その後学年が上がると成績が低迷したことを今でも悔しく思い出します。正直、教室で何を学んでいたのかは全く思い出せないので、野球を通じては多くを学びました。一番大切なことは全力を尽くすこととチームプレーの重要性であり、今の私の基盤になっています。野球部で同級生だった小笠原邦昭君は現在、岩手医科大学脳

中毒とブドウ球菌感染症に関する研究は、弘前大学においても継続的・発展的に続けることができ、今日の私のライフワークとなりました。これは中根教授の厳しいご指導と同時に、何時でも自由な発想ができ、自由にコミュニケーションができる環境のおかげだと思えます。現代社会において、感染症は依然として人類と動物の最大の脅威です。特に近年、MERSA院内感染、SARS、BSE、鳥インフルエンザ、新型インフルエンザ、口蹄疫などの新興・再興感染症の発生や、腸管出血性大腸菌食中毒などの食の安全の問題が社会を震撼させ、我々の現代社会のあり方や食文化と食生活を見直すまで深刻になりました！

弘前大学医学部鵬桜会総会
および60周年記念講演・
記念式典・祝賀会報告

泌尿器科学講座 教授 大山 力

平成二十四年五月二十六日、弘前大学医学部鵬桜会総会および六十周年記念講演・記念式典・祝賀会が六十三名(会員四十名)の参加のもと開催された。総会では、平成二十三年度収支決算報告、平成二十四年度事業計画、平成二十四年度収支予算の審議がなされ、平成二十四年度の助成金は、弘前医学会賞の運営、第五十七回社団法人口腔外科学会総会・学術大会および第五十六回東日本医科学学生総合大会主催業務および第四十七回全日本医科学学生体育大会王座決定戦の運営業務への援助に使用されることが承認された。また、鵬桜会は平成二十五年四月一日をもって県管轄の一般社団法人に移行することが報告され、一條宏明先生、大山力、副島薫先生、橋本浩先生の四名が新理事として承認された。平成二十三年度医科学二次学士編入生も本総会に出席し、西澤理事長より記念品が贈呈され、学生表彰として第五十三回東医体で優勝したスキー部の吉川良平君に記念品が贈呈された。

本年は弘前大学医学部鵬桜会六十周年にあたり、総会に引き続いて六十周年記念講演、記念式典および祝賀会が開催された。まず記念講演では、鵬桜会顧問・前理事長の石戸谷欣一先生に「弘前大学医学部鵬桜会の歩んだ道」と題して御講演頂いた。昭和十九年の青森医専設立から弘前の地に移転する経緯を含めて、現在に至るまでの道のりを先

(次ページへ続く)



(前ページより)
生御自身による詳細な史実調査に基づく検証を交え、ユーモア溢れる語り口で、名調子、石戸谷節を堪能させて頂いた。
続いて、「弘前大学医学部の過去・現在・未来―弘前大学医学部の世界―日本一」というテーマで弘前大学名誉教授・前弘前大学長の遠藤正彦先生に御講演を頂いた。本年一月まで本学を強力なリーダーシップで牽引してこられた遠藤先生の力強い御講演で、遠藤先生の「日本一の地方大学」構想は現役の私達の士気を鼓舞して余りあるものであった。
記念式典では、常務理事の澤田美彦先生の司会で西

澤一治理事長の式辞、佐藤敬学長、中路重之医学研究科長、藤哲医学部附属病院長から御祝辞を頂いた。また、本年は鶴松会六十周年というところで、六十年在籍会員の十和田で御開業の高橋二郎先生が表彰された。
記念式典の後、弘前大学医学部五十周年記念アンサンブル、弘前大学医学部管弦楽団による祝奏とともに、祝賀会が開催された。この祝賀会には平成二十三年度医学部二次学士編入生が招待され、一人ひとり会員に紹介された。(写真)その後、各年代代表の会員のスピーチもあり、盛会のうちには祝賀会が終了した。

第96回 弘前医学会総会

法医学講座 教授 黒田直人

平成二十四年六月十六日(土曜日)午後一時三十分より、黒石市のグリーンパレス松安閣において、三上忠英南黒医師会会長を総会長として第九十六回弘前医学会総会が開催されました。

評議員会では、次期開催地としてむつ市(平成二十五年六月二十二日開催予定)が選ばれました。評議員会より提出された議案は、三上総会会長を議長とする弘前医学会総会にて承認されました。

引き続き行われた一般演題は、四部構成、全十題が発表され、南黒医師会の北澤淳一先生、横山昌樹先生、福田陽先生ならびに長谷川聖子先生の各座長のもと、活発な質疑応答が展開されました。一般演題発表の後、審査を経て弘前医学会賞授賞式が挙行され、栄えある第九十六回弘前医学会総会優秀発表賞に弘前大学大学院医学研究科脳神経外科学講座・棟方聡先生(演題名:青森県における遷延性

意識障害の実態調査)が選ばれました。また、平成二十三年度弘前医学会優秀論文賞に輝いたのは、同研究科循環呼吸臓内科学講座(現八戸市立病院)の中村邦彦先生(論文題目:「Is Analysis of Exhaled Breath Condensate an Equivalent to Bronchoalveolar Lavage Fluid in Sarcoidosis Patients?」『弘前医学』第六十三巻第一号掲載)でした。

弘前医学会総会恒例の市民公開講座では、「青森県民の健康度」と題して弘前大学大学院医学研究科長中路重之教授より、一般の方々にわかりやすいご講演をいただきました。中路教授のお話を聞きにいらした聴衆は実に百四十名にのぼり、中路教授のお話熱心に聞き入っていらつしやいました。講演終了時には多数の方々からご質問もあり、市民公開講座は大変盛り上がりしました。

今回の弘前医学会総会では、南黒医師会の先生方から貴重なご支援とご協力によって盛況のうちに幕を閉じました。また、演題をお寄せ下さりご発表下さった諸先生方に対し、弘前医学会学内幹事会から厚く御礼申し上げます。

この度、「Is Analysis of Exhaled Breath Condensate an Equivalent to Bronchoalveolar Lavage Fluid in Sarcoidosis Patients?」にて、弘前医学会優秀論文賞を受賞いたしました。まず初めに、この度はこのような名誉ある賞を受賞させていただき、選考委員の先生方、ご指導くださった奥村謙教授、高梨信吾先生には深く感謝を申し上げます。

びまん性肺疾患において胸部レントゲン写真撮影することから始まり、血液検査、胸部CT、更には気管支肺胞洗浄(BAL)や経気管支肺生検などの病理組織学的検査を行うことで診断に至ります。しかし、気管支鏡検査は侵襲的であり、簡便に、また繰り返し行えないことが問題点とされます。呼気凝縮液(ETC)は呼気を急速冷

弘前医学会総会 優秀発表賞を受賞して

脳神経外科学講座 助教 棟方 聡

この度、第九十六回弘前医学会総会において、優秀発表賞をいただき大変光栄に存じます。選考委員の先生方をはじめ関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。今回、賞をいただいた発表は、「青森県における遷延性意識障害の実態調査」という発表でした。この実態調査は、二〇一一年に当科にて第二十回日本意識障害学会を開催するにあたり、学会長であった大熊洋輝教授よりご指示、ご指導いただき行われたものです。

遷延性意識障害患者の実態に関して、宮城県で調査が行われたことがある以外、都道府県単位で行われたという報告はありませんでした。今回の我々の調査では、県内のすべての病院・在宅療養支援診療

所、介護老人保健施設、障害者支援施設・療護施設に郵送によるアンケート調査を行い、二百七十七施設より回答をいただきました(回答率三一・八%)。その集計結果から、青森県における遷延性意識障害患者数は千九百九十八人にのぼり、人口百万にあたり八百六十九人と宮城県での調査結果の四百四十二人の約二倍であることが判明しました。原因の約六〇%が脳卒中であり、七十歳以上が占める割合が約八〇%であったことから、背景として本県が脳卒中多発県(男性・全国第一位、女性・全国第二位)であること、都市部と比較して高齢化が進んでいることが挙げられました。今後、さらに遷延性意識障害患者数の増加が予想され、本県における収容施設の不

却することで得られる液体が簡便かつ繰り返し採取することができると考えられます。本研究では、サルコイドーシス患者のETC中四十種類の炎症性分子を網羅的に解析すること、ETCの臨床的有用性を明らかにすることを目的としました。BAL液(BALF)中の六種、ETC中の十三種の炎症性分子がBALF中リンパ球分画(%Lym)と有意に相関しました。また、十六種の炎症性分子がETC、BALF間で有意に相関し、その内TNFi、sTNFi、BALF中とも%Lymと有意に相関していました。本研究から、ETCの分析はBALと同等の有用性を有する可能性があり、サルコイドーシスに関しては特にTNFi、sTNFi、RIIは病態を反映している可能性があると考えられました。

初期研修以降を含め四年間の臨床経験後に研究の機会を頂きました。当初から気道炎症を評価する方法として、ETCに注目していましたが、ETC中の炎症性分子は非常に低濃度と言われています。従来より行われていたさまざまな検査法を試し、最後に辿り着いたのがプロテインアレイ法でした。その後もサルコイドーシスという比較的稀な疾患を対象とした故に、呼吸器科の先生方にもご協力を頂き、ようやく本研究をまとめることができました。今までのように思い出されます。現在は臨床中心の生活を送っておりますが、機会あれば研究にも携わりたくと考えています。



弘前医学会受賞者

平成24年度
弘前大学
成績優秀学生表彰

学務委員長 若林孝一
(脳神経病理学講座 教授)

この取り組みは平成二十一年度目となります。各年度の成績が優秀であった学生を表彰するものです。今回、医学部は五名の学生(現在二、六年次)が選ばれました。このうち五年次の村井君は平成二十二年と併せ、二度目の表彰となります。また、大学院生に対しては一年次の成績をもとに優秀学生を選ぶことになっており、大学院二年の学生一名が表彰されました。八月一日に事務局大会議室にて表彰式が



平成24年度成績優秀学生表彰式

平成24年度弘前大学成績優秀学生

医学部医学科2年	村 上 圭 秀
医学部医学科3年	西 野 航 航
医学部医学科4年	松 崎 豊 久
医学部医学科5年	村 井 康 弘
医学部医学科6年	田 中 伸 子
医学研究科2年	櫻 庭 悟

行われました。学生諸君にはこの表彰を励みにさらなる発展を期待します。

第100回日本泌尿器科学会
総会賞を受賞して

先進移植再生医学講座 助教 米山 徹

二〇一二年四月二十一日より横浜市で行われた第百回日本泌尿器科学会において前立腺癌基礎部門で総会賞を受賞いたしました。受賞しました演題は、「F₄₂₀チロシンキナーゼは前立腺癌細胞のα-dystroglycanのラミニン結合糖鎖発現を介して細胞遊走能を制御する」です。

私は、タンパク質、遺伝子に続く第三の生命鎖と言われる糖鎖について研究を行っています。その中でも、上皮細胞の分化、基底膜の形成維持に重要な役割を果たし、先天性筋ジストロフィーの原因としてよく知られているα-dystroglycanのラミニン結合糖鎖について研究を行っています。本糖鎖の欠損は、筋ジストロフィーを引き起こすことがよく知られている一方で、癌細胞における本糖鎖の機能については、明らかとなっておりません。私たちは、悪性度が高い前立腺癌および乳癌細胞ほどラミニン結合糖鎖が減少すること、また癌細胞に発現するラミニン結合糖鎖が基底膜からの細胞遊走シグナルを弱めることで癌の浸潤、転移を抑制することをPNAS(2009)に報告しました。本研究では、これまで不明であったラミニン結合糖鎖の発現を調節する分子をsiRNA Kinase libraryを用いて、系統的に解析しました。ス

クリーニングの結果、ラミニン結合糖鎖の発現を調節するF₄₂₀チロシンキナーゼ(Fer)を同定しました。Ferは、悪性度の高い前立腺癌細胞ほどその発現量が高く、ラミニン結合糖鎖の合成に関わる糖転移酵素群(β3GnT1およびLARGE)の発現と全く逆の発現パターンを示し、Ferの発現

がラミニン結合糖鎖を特異的に減少させることで細胞の遊走能、浸潤能を活性化していることが示されました(MBoC, Yoneyama et al 2012)。F₄₂₀ Ferによる糖転移酵素群の発現調節経路は、これまでに報告されていない新規の経路であり、また前立腺癌の進展抑制に関する新規分子標的となる

可能性が示唆されました。この度、私達の研究が評価され、総会賞を獲得できたことは大変喜ばしいことであり、今回の受賞を励みに、さらに粛々と研究を進めたいと考えております。最後になりましたが、本研究のご指導を頂きました泌尿器科学講座の大山力教授、Sanford Burnham 医学研究所の福田 穰教授、他様々な面でサポートして頂いた教室の皆様にご場をお借りして厚く御礼申し上げます。また引き続きご指導賜りたく存じます。

70th American Academy of Dermatology
Registration Scholarship
皮膚科 医員 皆川 智子

American Academy of Dermatology (AAD) からScholarship 頂き、第七十回AAD annual meeting Registration Scholarship Programに参加しました。

二〇一二年三月十四日 外来業務終了後、一七:二〇 青森空港発、三月十五日午前一時にサンディエゴのホテルに着きました。

十五日 Roy S. Rogers, III MD (Chair, International Affairs Committee) 主催のAAD leadership dinnerに参加しました。AADと交流のある各国の皮膚科学会から選ばれた若手医師が一堂に会しての食事会で、Dr. Rogersのスピーチの後、一人一人自己紹介を兼ねたテーブルスピーチが

あり、私は震災後の日皮や弘前大学の診療支援が行われたことをのべ、各国からの援助に感謝しました。八人×十二個のテーブルを延々とマイクがわたり、最後の参加者のスピーチ後、名刺交換会になりました。私は女性医師問題担当のMurrell先生のもと和気藹々と語り合いました。(皆川:前列右から三人目)

十六日の夜は Welcome Reception 後、Murrell 先生のお誘いで女性医師の集まりに参加しました。十七日は Florida Academic Dermatology Centers of Kerdal 教授との昼食会、夜はトーマスジェファソン大学の同窓会で二〇一六年東部支部でご講演いただくUto 教授にお会いしました。十八日は University of Texas Southwestern Medical Center の Kim Yancey 教授との昼食会で、夜はペンシルバニア大の同窓会に参加し、二〇一〇年に半年間研

修した皮膚病理部や外来の先生方と再会しました。残念ながら最終日まで参加できず、十九日夜サンディエゴを離れ、二十一日朝青森空港につき、そのまま外来に直行し、疾風怒濤のように Registration Scholarship Program は終わ

りました。今回 Scholarship をいただき、思い出深く、学術的にも充実した学会参加ができ、モチベーションがあがりました。皮膚科の諸先生方、息子を預かってくださった夫の母、ひろだい保育園の先生方に感謝申し上げます。



2012 AAD International Scholarship Recipients & Committee Members

学士編入学（2年次後期）試験が終わる

医学科入試専門委員長 鬼島 宏
(病理生命科学講座 教授)

平成二十四年十月入学予定の二年次後期学士編入学生は、弘前大学医学部医学科に学士編入学制度が導入されてから一週目に当り、三年次前期から二年次後期へと編入学の時期が変更されてから三年目となります。平成二十四年度編入学試験は、六月三日に第一次選抜試験が行われ、合格者百一名に対して六月三十日・七月一日の両日に第二次選抜試験が行われ、七月二十五日に最終合格者二十名の発表が行われました。

今回の入試選抜の志願者は三百六十一名（県内枠三十七名を含む）と、昨年度に比べ十九名減少しましたがほぼ同様であり、倍率は一七・一倍でした。内訳は県内枠七・四倍（昨年度六・六倍）、一般枠は二・六倍（昨年度二・九倍）でした。三年次学士編入学の時のように卒業見込みの学生が受験できないことや、最近では学士編入学を実施している国立大学の大部分が二年次編入へと移行している傾向もあり、今後もおよそこの受験数で推移していくものと見積もっています。

	在学中	1年	2年	3年	4年	5年以上
H15年度	3	4	2	2	2	7
H16年度	2	1	3	2	3	9
H17年度	5	2	2	2	4	5
H18年度	3	1	3	2	2	9
H19年度	2	2	4	0	1	11
H20年度	2	3	0	1	1	13
H21年度	7	2	1	0	3	7
H22年度(3年次前期)	5	2	1	2	1	9
H22年度(2年次後期)	0	4	4	3	1	8
H23年度(2年次後期)	0	3	3	3	4	7
H24年度(2年次後期)	0	1	2	2	5	10

	文系	理工系	農学系	歯学系	薬学系	獣医系	医療系	その他(外国等)
H15年度	6	3	6	0	3	0	0	2
H16年度	8	8	2	0	1	0	1	0
H17年度	4	10	3	1	2	0	0	0
H18年度	1	10	3	0	2	0	3	1
H19年度	0	10	2	1	5	1	0	1
H20年度	2	5	6	0	4	1	1	1
H21年度	3	6	2	2	5	0	2	0
H22年度(3年次前期)	3	4	5	1	4	0	3	0
H22年度(2年次後期)	1	9	2	1	3	0	2	2
H23年度(2年次後期)	4	5	5	0	4	0	2	0
H24年度(2年次後期)	0	7	1	0	9	0	2	1

	男	女
H15年度	14	6
H16年度	13	7
H17年度	12	8
H18年度	17	3
H19年度	14	6
H20年度	13	7
H21年度	15	5
H22年度(3年次前期)	17	3
H22年度(2年次後期)	14	6
H23年度(2年次後期)	16	4
H24年度(2年次後期)	20	0

	22～25歳	26～30歳	30～35歳	36歳以上	平均年齢
H15年度	9	11	0	0	26 ± 2.3
H16年度	7	10	2	1	28 ± 3.7
H17年度	9	6	4	1	27 ± 3.9
H18年度	6	10	4	0	28 ± 3.8
H19年度	7	9	3	1	28 ± 3.6
H20年度	4	11	5	0	28 ± 3.8
H21年度	8	8	3	1	27.05
H22年度(3年次前期)	7	7	5	1	28.1
H22年度(2年次後期)	10	7	3	0	26.45
H23年度(2年次後期)	8	9	1	2	27.1
H24年度(2年次後期)	2	13	5	0	28.8 ± 3.0

	修士	博士	合計
H15年度	8	1	9
H16年度	7	1	8
H17年度	6	3	9
H18年度	9	2	11
H19年度	11	1	12
H20年度	6	4	10
H21年度	6	2	8
H22年度(3年次前期)	6	1	7
H22年度(2年次後期)	5	1	6
H23年度(2年次後期)	6	0	6
H24年度(2年次後期)	11	2	13

平成24年度（2年次後期）出身大学
 3名：京都大、慶應義塾大
 2名：東北大、北陸大
 1名：金沢大、富山医科薬科大、早稲田大、茨城県立医療大、共立薬科大、東京薬科大、星薬科大、岐阜薬科大、京都薬科大、東京農業大

突然の病気で大切な家族の心臓や呼吸が急に止まったり、意識を失った時に、その場に居合わせた人の適切な対応で命が救われたり、重症化を回避できることがあります。今年度の公開講座では、高度救命救急センターで活躍する三人の医師が、一般市民を対象に救命救急法や応急処置法について解説しました。テーマは「あなたが家族を救います。」です。八月三十一日コミュニケーションセンターで開催し、八十名以上の参加者で会場は一杯となりました。

最初に矢口慎也医師が、熱中症やけがの応急処置について解説しました。連日三十度を超える猛暑が続いているためか、熱中症について「気温が何度以上であれば発症するのか」「どのような症状に注意すべきか」「予防のためにスポーツ飲料はどの程度飲んだらよいのか」などの質問が数多く寄せられました。



伊藤勝博先生



花田裕之先生



矢口慎也先生

最後に、伊藤勝博講師が「あなたの前で家族があったら（脳卒中になったら）」とのタイトルで、脳卒中を疑うポイントやいち早く救急車を呼び、発症後速やかに治療を開始することの重要性を説かれました。脳外科医が少ないものの、地域内連携を取りなが

ら救命に取り組んでいる脳卒中治療の現状についても触れられ、思わずエールを送りたくなるような講演でした。医学研究科では市民を対象とした公開講座を例年開催していますが、今回の参加者数の多さを見ましても、一般市民の方々の医療に対する関心は高く、医学研究科から様々な分野で情報発信をし、市民と交流を深めてゆく必要性が再認識された公開講座となりました。

平成24年度 医学研究科公開講座
「あなたが家族を救います。」
 広報委員長 袴田健一
 (消化器外科学講座 教授)

AO入試スクーリングが開催される

―県内高等学校進路指導担当教諭との懇談会も含めて―

入試専門委員長 鬼島 宏
(病理生命科学講座 教授)

平成二十一年度の入試から新たにAO入試(アドミッション・オフィス入試)が行われ、AO入試も五年目に入りました。受験生に弘前大学医学部医学科を理解していただく目的で、本年度も二回のスクーリングを実施しました。

平成24年度 第2回
弘前大学
医学部医学科スクーリング
「修士を授かる医師の育成」
～医師たる人材の発掘・弘大AO入試～
日時 平成24年8月9日(木) 13:00～15:30
場所 医学部基礎大講堂
受付 12:00～13:00
講義1 13:00～13:30
「弘前大学医学部の特色と将来性」
入試専門委員長 鬼島 宏
講義2 13:30～14:00
「弘前大学AO入試選抜の概要」
入試専門委員長 鬼島 宏
講義3 14:00～14:30
「弘前大学医学部医学科の教育」
学務委員長 若林 孝一
小林 彰 14:30～14:40
講義4 14:40～15:10
「北日本の医学を担う若者へ」
弘前大学長 佐藤 敬
質疑応答 15:10～15:30
お問い合わせ先: 弘前大学医学部研究科グループ事務局
電話 0172-39-5204

さらに福田眞作附属病院副院長による講義「躍進を続ける弘前大学医学部附属病院」では、最近の先端医療の紹介を交えながら附属病院のすばらしさを語り、参加者はいずれの講義も熱心に聴き入っていました。

第二回目のスクーリングは八月九日(木)に行われ、昨年と同様前日に開催されたオープンキャンパスを合わせて二日間参加された方も多かったようです。今回の参加者は八十五名で、昨年の計六十一名を超過、第二回スクーリングとしては、過去最高の参加人数でした。



「弘前大学医学部の姿勢と将来性」が行われ、弘前大学医学部の概要と医学部学生・医師・医学研究者として求められる人間像についてのお話がありました。入試専門委員長による講義「弘前大学AO入試選抜の概要」ではAO入試の概要「ではAO入試の資格、選抜方法、医学教育六年間について話をしました。」

導担当教諭との懇談会が開催されました。この懇談会も今年で八回目となり、弘前大学側から、中路医学部長、入試専門委員長をはじめ七名、県内高校側は十六校十七名の進路指導担当の先生方が出席しました。中路医学部長のあいさつの後、入試専門委員長から平成二十四年度の入試結果と平成二十五年度の入試の変更点について説明を行いました。その後、大学



と高校間の質疑応答や意見交換が行われ、一時間半の懇談会が終了しました。質疑応答はAO入試が中心であり、生徒はもちろん、高校関係者や保護者もきわめて高い関心が寄せられていることを改めて実感しました。最後に、二回のスクーリングの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方および学務グループに深く感謝いたします

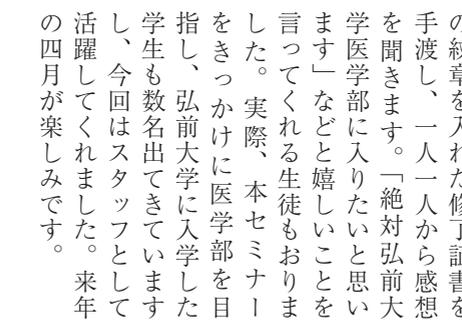
「高校生手術体験セミナー in 青森」を開催

消化器外科学講座 教授 袴田 健一

去る六月三十日土曜日、青森高校学習センターにおいて「高校生外科手術体験セミナー in 青森」が開催されました。第五回目を迎える本セミナーは、次代を担う中高生に、医学や医療に関心を持ってほしい、医師を目指してほしいの思いから、本学所属ならびに県内の外科医が中心となり、県内各地で開催してきました。今回は青森地区を中心とする五十六名の高校生が参加し、医師三十二



名、医学部学生二十名、企業関係者二十三名、計七十五名のスタッフがセミナーを支えました。昨年は東京からむつ市にダビンチ一台を陸路搬送し、世界で初めてとなるロボット手術操作体験を含むセミナーを開催したので、終了後のアンケート調査では、むしろ皮膚縫合処置やシミュレーターを用いた腹腔鏡手術など、外科医から直接技術指導が受けられるブースの人气が高



最後は、弘前大学医学部の紋章を入れた修了証書を手渡し、一人一人から感想を聞きます。「絶対弘前大学医学部に入りたいと思います」などと嬉しいことを言ってくれる生徒もおりました。実際、本セミナーをきっかけに医学部を目指し、弘前大学に入学した学生も数名出てきていますし、今回はスタッフとして活躍してくれました。来年の四月が楽しみです。



コラム

医学部 二ぼね話

この八月に行われたロンドンオリンピックは寝不足になりましたが、日本が取得したメダルも過去最高と盛りの上がりでした。活躍した選手に青森県の出身の方や、本県に関連のある方も多かったと思います。スリリングの小原選手などは、弘前大学でもよく聞かれます。将来は弘大医学部からオリンピック選手がでるかもしれません。先日、たまたまテレビをつけたら、クイズ番組に、弘前大学医学部の学生が出ていました。最後にすっけていました。大活躍でした。みんな活躍してほしいです。

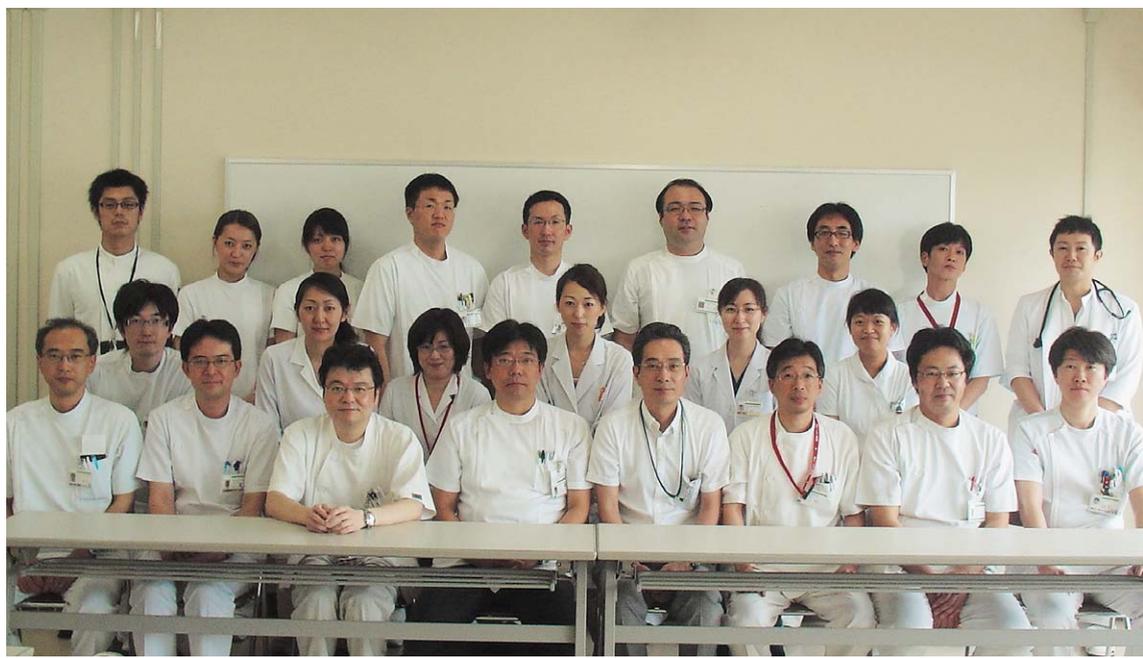
研究室紹介

消化器血液内科学講座

消化器血液内科学講座 教授 福田眞作

消化器血液内科学講座（旧内科学第一講座）は、昭和二十一年五月に初代・故松永藤雄名誉教授が東北帝国大学医学部から青森医学専門学校に赴任して開

講され、以来、約七十年にわたって五百名を超える同門諸氏を輩出してきました。昭和五十年に二代目吉田豊名誉教授へ、そして平成八年に三代目棟方昭博



名譽教授へと引き継がれ、平成十九年八月より四代目として私が講座の主任を担当しています。当教室は、現在、教授以下六十余名の教職員で構成されますが、約四十名という非常に多くの教室員が関連病院へ出向し、同門の先生方と一緒に地域医療を支えています。残りわずか二十四名の教室員が、それぞれの特徴を生かしながら、医学部および大学病院における研究、診療、教育に取り組んでいます。

大学病院における当科の診療内容を紹介します。消化器疾患、血液疾患、膠原病疾患、心身症を担当していますが、原因不明のさまざまな症状（腹痛、下痢、貧血、発熱、関節痛など）を訴える患者さんの診療にあたっています。「受診した患者さんは、まずは診る」が当科開講以来のモットーであり、「困ったときは、とりあえず旧第一内科へ」と、地域ならびに職員からも高い信頼を寄せられています。また、悪性腫瘍の内視鏡診断・治療、炎症性腸疾患の治療、肝がんの内科的治療（経皮的ラジオ波焼灼術）および難治・再発性造血器腫瘍の治療など、最先端の診断技術、治療法を積極的に取り入れ、青森県全域への普及

を図っています。今後とも、消化器・血液・膠原病診療の最後の砦であるとともに、新規医療の発信地点としての使命を果たしていきます。

次に当科の研究について簡単に紹介します。開講以来、主に消化器（管）に関する研究が展開されてきました。大腸ファイバースコープの開発、便潜血検査による大腸がん集団検診方

式の確立、消化器癌の内視鏡治療、炎症性腸疾患の病因に関する研究、糖質・食物繊維の消化・吸収、ヘリコバクター・ピロリ感染症に関する研究および血栓止血に関する研究など、多領域の研究成果を報告してきました。その多くは、基礎医学講座（細菌学、病理学、免疫学、生化学、社会医学、脳血管病態学など）との共同研究によるものです。医

弘前大学 オープンキャンパスが 開催される

入試専門委員長 鬼島 宏 教授 (病理生命科学講座)



八月八日（火）に弘前大学オープンキャンパスが開催されました。昨年は過去最大の四百八十一名という参加者数でしたが、今年はその数を大きく上回り、五百七十一名となり、参加者数が更新され、大盛況でした。

午前十時からプログラムが開始しました。まずは中路重之医学部長から、オープンキャンパスへの参加の歓迎と弘前大学医学部学科への誘いの挨拶がありました。次いで、若林孝一学務委員長から弘前大学医学部医学科の特徴ある研究・教育についての紹介・説明が行われました。引き続き泌尿器科学講座の大山力教授から「君もダヴィンチオペレーター」苦しくない・痛くない外科手術」と題した模擬講義が行われました。北海道・東北で初めて導入された手術支援ロボット「ダヴィンチ」の紹介や外科治療の現場の話、さらには泌尿器科学の最新

情報が紹介され、大山教授の弁舌さわやかな語り口に参加者は聴き入っていました。その後一転リラックスした「学生コーナー」が始まりました。医学科一年次から五年次の学生諸君が「学生生活楽しみ中」と題して、楽しく、かつためになる学生生活を語ってもらい



ました。昼食後、青森県健康福祉部から担当の方に来ていただき、「医学修学資金貸与制度について」についてお話しをいただきました。引き続き施設見学のプログラムです。まず参加者全員で大講義室で消化器外科科学講座の袴田健一教授と木村憲央助教の解説のもとに手術ビデオが放映されました。これは毎年もとても人気のあるプログラムです。生徒達の興味半分から真剣なまなざしに変わっていく様子は、袴田教授や木村助教の魅力のなプレゼンテーションによるものが大きいと思います。最後に薬剤部、検査部、放射線部の三部門の施設見学が行われました。施設見学は、三十名一グ

平成24年度 実験動物慰霊式

附属動物実験施設長 上野 伸哉 (脳神経生理学講座 教授)

六月十四日に実験動物慰霊式を開催しました。本年は、名称を動物慰霊祭から変更してはじめての開催となり、また名称のみならず、式進行も変更を加え、最初に慰霊碑前での代表者による献花、その後、記念講演会となりました。教員および学生献花は記念講演の後に時間をとることとなりました。

今回の記念講演は、前動物実験施設長の弘前大学医学研究科感染生体防御学講座の中根教授に「弘前大学動物実験のルール作りのこれまでと今後」のタイトルでお願いしました。中根教授は二月より弘前大学の理事もつとめられており、弘前大学の実験動物、動物施設の歴史と大学としての今後を示していただきました。



近年遺伝子改変動ループとして一部門二グループずつ計六グループで行いましたが、希望者がとても多く残念ながら施設見学できない皆さんも数多くおられ、嬉しい悲鳴とともに来年度への課題となりました。施設見学と並行して、午後一時半に在校生と見学者との意見交換会が行われ、医学科のオープンキャンパスが閉幕しました。

今年も参加者は、県内、東北各地のみならず、全国から参加者が集まりました。「学生コーナー」は今年も学生自治会に協力を求め、受付時の誘導、施設見学の付き添いも担当してもらい、参加した生徒と医学科学生のふれあいの時間が増しました。最後に、今回のオープンキャンパスの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方、学生諸君、学務グループに、深く感謝いたします。

第54回 北日本病院懇親 野球大会を振り返って

大会事務局 袴田健一
(消化器外科学講座) 教授



第五十四回を迎えた本大会には、北は函館から南は秋田まで、弘前大学と関連のある医療機関から三十一チームが参加し、八月十九日、二十五日、二十六日の三日間、九球場で熱戦を繰り広げました。学内からは教授団と整形外科の二チームが出場しましたが、それ以外にも、多くの学内医師が関連する医療機関から参加し、大会全体を盛り上げました。本来であれば、全試合を総評すべきところですが、本誌の恒例に從って教授団の奮闘ぶりをご紹介します。

開会式直後の初戦は教授団対強豪健生病院。中路総監督の指揮の下、九時にプレーボールとなりました。平均年齢で大きく上回る教授団は、気温三十度を超える炎天下では勝負よりも熱中症が危惧されましたが、大方の予想とは裏腹に、伸びやかなプレーで攻守ともに終始相手を圧倒しました。圧巻は早狩選手の打たせて取る投球術。さらに、ファースト福田真作選手の華麗なグラブさばき、セカンド大熊選手の手強い捕球、長打を単打に変える上野選手の体を張ったプレー、切れ味鋭い漆館選手のスイング、



上野選手、大熊選手の適時打、など。学内の医師・薬剤師・事務方強力助っ人選手の支援を得て、六対四で勝利しました。萱場選手の長身を生かした応援、講座関係者の手厚い応援も光りました。まさかの初戦勝利に、当惑したのは応援に駆けつけた藤病院長。実は、二回戦の相手が、本大会三連覇中の整形外科と決まっていた

○平成23年度科研費 申請・内定状況 (新規+継続)

部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	171	66	38.6%	180,570
医学部附属病院	114	31	27.2%	53,950
計	285	97	34.0%	234,520

○平成24年度科研費 申請・内定状況 (新規+継続) (※)

部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	182	83	45.6%	187,720
医学部附属病院	104	30	28.8%	47,710
計	286	113	39.5%	235,430

○平成24年度科研費 研究種目別内定状況 (新規+継続) (※)

研究種目名	医学研究科	医学部附属病院	合計
基盤研究 (S)	0	0	0
基盤研究 (A)	1	0	1
基盤研究 (B)	7	0	7
基盤研究 (C)	39	17	56
特定領域研究	0	0	0
新学術領域研究	2	0	2
挑戦的萌芽研究	16	3	19
若手研究 (S)	0	0	0
若手研究 (A)	0	0	0
若手研究 (B)	18	10	28
研究活動スタート支援	0	0	0
特別研究促進費	0	0	0
研究成果公開促進費	0	0	0
特別研究員奨励費	0	0	0
合計	83	30	113

※平成24年度研究活動スタート支援(新規課題)については、現在日本学術振興会にて審査中のため、申請件数、採択件数に含めていない(平成24年9月末時点)。

採択数で一割超の増加

分子生体防御学講座 教授 伊東 健

医学研究科および附属病院における平成二十四年度の科学研究費採択状況が公表されました。まずは付表をご覧ください。平成二十三年度と比較すると、採択件数では附属病院ではあまり変わりませんが、医学研究科では六十六件から八十三件と大幅に増加しました。医学研究科では採択率も四五・九%と増加しました。しかしながらこのような採択件数や採択率の増加が獲得額の増加にそれほどつながらないのが現状です。これは、獲得研究費のほとんどが基盤Cや若手Bといった比較的小額の研究費であることに起因すると思われる。実際に弘前大学教員一人あたりの研究費獲得額は全国平均を大きく下回っており、大学全体あるいは研究科全体として研究力の向上をはかり、基盤Aや基盤Sなどの大型予算の獲得増加を目指す必要がある。これには時間がかかるかもしれませんが、着実に取り組むべき課題です。とりあえずは来年度のさらなる飛躍を目指して頑張りましょう。

人事異動

●大学院医学研究科

辞職(24・6・30)
内分沁代謝内科学講座 助教
田辺 壽太郎
(大館市立総合病院)
採用(24・7・1)
内分沁代謝内科学講座 助教
佐藤 江里(医員)
採用(24・7・16)
腫瘍内科学講座 教授
佐藤 温(昭和大学)

●附属病院

辞職(24・7・31)
泌尿器科学講座 准教授
神村 典孝
(国立病院機構 弘前病院)
分子病態病理学講座 助教
矢嶋 信久
(八戸市立市民病院)
採用(24・8・1)
泌尿器科学講座 講師
橋本 安弘
(鷹揚郷腎研究所 弘前病院)
麻酔科学講座 助手
蝦名 正子(医員)

辞職(24・6・30)
高度救命救急センター 助教
青木 哉志
(ベンシルバニア大学)
脳神経外科 助手
松田 尚也(医員)
採用(24・7・1)
高度救命救急センター 助手
菊池 潤(医員)
辞職(24・7・31)
泌尿器科 助教
石村 大史
(鷹揚郷腎研究所 弘前病院)

編集後記

今年は昨年より暑いですが、この文章を書いている九月十八日の最高気温は弘前で何と摂氏三五・二度。地球のサーモスタットが故障してしまったかのようです。

学部長が青森医専誕生の裏話を寄稿しています。青森に何としても医専をという当時の方々の情熱、中央とのコネクションを作るのに苦労された様子が伝わってきました。

また、医学部同窓会が六十周年を迎えた記事がありました。その記事の中にもありました。「日本一の地方大学を目指す」という前学長のスローガンは本当に心強いものでした。文科省は各大学の研究力を分析・評価した上でリサーチ・ユニバーシティを選抜し、集中支援する計画を検討中とのこと。そういった対策も必要なのかもしれません。医学部にとつて臨床、研究、教育は三位一体であり、どれが欠けてもうまく働かないことを理解していただいた上で、地方大学の医学部を支援していただくことを願っています。一方、私たち大学の側も、折しも勝負を終えたオリンピックの選手のごとく、四年をもつて一つの改革を勝ち取れるように進化し続けなければならぬのだと思います。(伊東)

社団法人 青森医学振興会

沿革 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鷹揚医学振興会発足(任意団体)
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立許可(青森県)

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようとする事業を行っております。

- 医学教育の助成 教育活動を活性化するための支援
- 医学研究の助成 研究活動を高度化するための支援
- 地域医療振興事業の助成 地域医療に貢献するための支援
- 医学国際交流の助成 国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会	普通 1087485	※ 各銀行の本支店及びゆうちょ銀行から振込む場合は、手数料無料です。
口座	青森銀行 弘前支店 みちのく銀行 大学病院前支店 ゆうちょ銀行振替(旧郵便振替)	普通 0198579 02200-4-57580	
会費	会員種別	年会費	お振り込みいただく場合は、お手数ですが、振興会事務局までご連絡(電話、メール)願います。
	医学部教員	1万円	
	医学部卒業生	2万円	
	賛同する個人	1万円	
	賛同する団体	10万円	

お問い合わせ TEL:0172(33)5111内線6519 E-mail:jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学後援会のご案内

会長 石戸谷 忻一

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部広報・国際課 (Tel:0172-39-3012 E-mail:jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp) までご連絡いただくか、弘前大学後援会ホームページ (<http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html>) をご覧ください。